師匠のグッド・バイ

裏メニューの常連〜前座〜

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18534911

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 霊幻総受け, もぶおじさん×霊幻, 出歯亀, 潮吹き, 濁点喘ぎ, モ腐サイコ小説50users入り

高級娼婦から足抜けしようとする師匠とそれを手助けする悪霊のエク霊です。今回特殊プレイ満載です。もぶおじさんに抱かれる師匠を淡々と悪霊が実況してます。潮吹きプレイ、濁点喘ぎあります。お好きな方はよろしくお願いします。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

裏メニューの常連〜前座〜

「予約キャンセルだぁ？」
相談所で2人きりになった途端、霊幻に切り出されて俺は当然不機嫌になった。
「いやその……急な下痢で」
「フェラだけでも俺は別に構わねーけど」
「……母が急病で」
「おいウソつくな。……ヤバい客が割り込んで来たんだな？」
少し迷ってから、霊幻は頷く。
極力、客の個人情報は漏らさない。その辺は霊幻は徹底していた。
「丁度いい機会じゃねぇか。もうウリ辞めるって言ってこいよ。それで予約キャンセルは大目に見てやるよ」
「……助かる。そうするわ」
ほ、と霊幻の肩の力が抜けた。
「ただし、俺様も付いていくからな。揉めた場合のケツモチだ。助けに入ってやる」
「げ」
「なんだよ」
「いや……他の客に抱かれてんの見られるのは、ちょっと……」
「安心しろ。濡れ場になったら席外してやっから」
「……ならいいけど」
嘘だけどな！せっかくの無料ＡＶ【知り合いが出演】を見逃す馬鹿はいない。こいつどんな風に他の客に抱かれてんのかな。めちゃくちゃ楽しみだ。
……あと、警戒半分だ。またこの間みたいに客に殺されかかっちゃたまらねぇからな……。セックス中なんて、隙だらけだ。気をつけるに越したこたぁない。
「それとな、エクボ。しばらくお前からの予約取れそうにないんだ」
「はぁ！？」
「俺、組から言われてる『絶対に断るな』『他の客より優先』って

太客が３人いるんだけど、そいつらがちょっと、エクボに嫉妬したみたいで……立て続けに予約入れてきてんだよ。いつもは１か月に１回予約するかしないかなんだけど……」
「……お前がウリ辞められないのって、その３人から組に圧力がかかってるからか？もしかして」
「そ。良くわかったな」
「……ヤクザからの指示がヤバすぎんだろ。で、どんなやつらなんだ？」
「客の個人情報は──」
「オイ共犯者だろ、俺ら。本気で足抜けする気あんのか？お前」
ぷに、と薄い唇を霊幻が指で触る。少し考えてから、口を開いた。
「……知らない方がいい、って言われてるんだ。だから俺は敢えて詮索してない。けど、少し客から教えて貰ってることはある」
「ふんふん」
「まず予約横入りしてきた人。本名不明、『きぃちゃん』って呼べって言われてる。お金持ちなことは確かだ」
「ほうほう、それで？」
「それ以外は不明だ。俺はこれ以上知ることを許されてない。──けど、お前が勝手に知ってしまうのは、仕方ないよなぁ？」
ニヤリと笑う。うーん、いい悪い顔だぜ、霊幻。
「２人目。中国人の貿易商の男だ。若いけど金持ち。基本的に日本に暮らしてて、日本語がまぁまぁ上手い。なんかヤクザが……というかケツモチのマサくんが、めっちゃビビってる。なんでかは知らん」
ん？中国人、で貿易商？
……まさかな。
「３人目。コイツがな……ずっと俺を身請けしようとしてて、１番困った客なんだよな……。なんか知らんがめちゃくちゃ金持ってるロシア人の男だ。俺、こいつに無理矢理ヤられて、そこからズルズル身体売ることになったんだよな」
「……はぁ！？」
「……昔話していいか？」
「きかせろ」

霊幻が伸びをする。
ぎっ、と所長の椅子が軋んだ。
「丁度モブが相談所に通い始めた頃のことだ。除霊にまだ慣れてなかったモブが、家屋を半壊させてしまってな。その弁償代をすぐ用意しなくちゃならなくなった」
ふむ。
「俺は銀行に掛け合ったが、商売が商売だけに、融資して貰えなくて。それで闇金に駆け込んだんだが……どうも踏ん切りが付かなくて。だって利息が馬鹿馬鹿し過ぎてだな……で、３時間ぐらいうんうん唸って悩んでたら、ヤクザが出てきた」
……迷惑な客だなおい。
「で、ヤクザに品定めされて、手コキとフェラだけで風俗で働く気は無いか？って言われたんだ。たしか、『喋らなきゃ顔はまぁまぁだし、スタイルも悪くない。それに色が薄くて珍しい。上客の好みに合いそうな男だ』って感じだったかな」
ほうほう。
「まぁ、それぐらいで稼げるなら……と思った俺は了承した。それで、俺は『本番無し』のネクタイピンを付けて、オークションに出たんだ」
ふーん。
「知ってるか？今時の人身売買オークションって、パーティーみたいにしてやるんだぜ。会場のテーブルに『商品』が目一杯着飾って座って、手元に値札が置かれる。客は自由に商品と会話して、気に入ったのが居れば値札を確認するんだ」
ふんふん。
「俺はヤクザから借りたヴェルサーチのスーツを着て、テーブルでメシ食ってた。買ってもらえないことも多いらしいし、俺は客を厳選したかったから相場の３倍の値段……３０万ほどかな、それぐらい吹っかけてたからな。腹１杯にはせめてしたかったんだよ」
Ａコースの値段はそこからか……。
「男女問わず、そこそこ声をかけられてビックリした。でもみんな値札を見たらそそくさとどこかに消えてった。そんな時、イケメンのロシア人が声を掛けてきた。……ロシア語で」

ふんふん。
「さっぱり分からなかったけど、俺は身振り手振りで適当な事を言って、何度も乾杯した。俺は酒は舐めるだけだったけど。そしたら、物怖じしないのが気に入ったとかで、俺はその晩、そのロシア人に買われることになった」
……。
「でも、そいつは『本番無し』と言う日本語が読めて無かったんだ。あの値段だから当然本番有りだと思ったみたいで、フェラした後、お触り禁止なのにベタベタ触られて、そんであれよあれよと……」
「ヤられちまった、と」
「嫌だって言ったのに、ダメだって言ったのに……まぁ日本語通じて無かったんだけどよ」
「良くもまぁそんな相手と２人きりになったもんだ」
「仕事だから仕方ねぇだろうが。で、ケツモチに泣きついた。最初ケツモチは『処女の値段じゃねぇぞ、とんでもない客だ』って怒ってくれたんだけど、相手とやり取りする内に、ヤバい客だったのか、みるみる真っ青になって、『泣き寝入りしてくれ』って言い出してな」
「……まぁヤバい客だったんだろうな」
「そうらしいんだよ。『その代わり金はたっぷり貰ってきた』って２００万差し出してきて。『悪いけど、先方が飽きるまでこの値段で身体売ってくれねぇか』って銃突き付けて説得されてな」
「世の中ではそれを脅迫と呼ぶんだが」
「それならって引き受けたんだが、なんかそいつにだけ抱かれてる状態って、愛人みたいでヤバいなって思ったから、他の客にも同じ値段で身体売ることにしたんだよ。値段が値段だし、まぁそうそう売れないだろうと思ってたんだが……」
「ヤバい客ばっかり買いにくるようになった、ってことか」
「……そういうことだ。しかもロシア人が中々飽きてくれないどころか身請けしようとゴネるオマケ付きだ」
「ズブズブじゃねーか」
「……ホントに俺、ちょっとだけの手コキとフェラだけの副業のつ

もりだったんだって……」
運がいいのか悪いのか分からない男だ。まぁ昔のことはこれで大体分かった。あとコイツの仕事に対する姿勢が悪い方向に働いたことも。いや、立派すぎるほど見事な高級娼婦になっちゃってるぞお前。プロ精神が高いのも考えものだな、こうなると。
「で、そのロシア人のことも、知らない方がいい、と言われてると」
「……そうなんだよ。なんか貿易の仕事してるって言ってた。あ、ロシア人の方は本国に基本住んでて、年に数回日本に来てる。俺のことはその時に買う感じだ」
貿易、貿易ねぇ……。
めちゃくちゃ引っかかるが、先ずは調査してからだ。
「……後は頼んでいいんだよな？」
甘えるように霊幻が俺様を見上げる。やめろそれは俺様に効く。
「おう。任せろ。お前はちゃーんと全員に別れ話をすることだけ頑張れ」
「……うん」
霊幻がぐっと手を握りしめ、爪が白くなっていた。
……さぁ、ここからが悪霊の見せ所だ。気張れよ、俺。

※※※※※

１人目の厄介客の予約時間になった。
俺は不可視モードを強めて霊幻に付いていく。
と、ケツモチのマサが先に車で客と待っている。何か話し込んでいて、霊幻は車の外で話が終わるまで待つようだ。
俺様は当然、車の中に入って盗み聞きすることにした。
「……分かりました、その件は上に伝えておきます。先生も御口利きのほど、よろしくお願いします」
５０代くらいの高そうなスーツを着た男がマサと話している。……ん？先生、だと？
「頼んだよ、マサ君。それで、最近霊幻君に付き纏ってる男なんだがね、キミの方で処分できないのかい？」

おっと。
「……素性が知れないんですよ。ヤバいバックが付いてたら俺じゃあどうにもできません」
「使えないなぁ……タダでさえ新隆には目障りな害虫が２匹も付いてるのに、これ以上増やして欲しくないんだが」
おいおいおい自分のことは棚に上げるなぁ？
５０代のオッサンが若いツバメのケツ追いかけてんの、充分情けねぇの気が付いてないのかねぇ？
「……それにアイツ、変な細工をするってもっぱらのウワサですよ。霊幻さんのストーカーが、追い払われる時に、妙な目に遭ったって騒いでました。関わらない方がいいと思いますよ」
「チッ……まぁいい。今日こそ新隆に身請けをうんと言わせてやる。……呼べ」
おいコラ霊幻、このオッサンからも狙われてんじゃねーか！
「霊幻さん、愛人になる気は無いってずっと言ってるじゃないですか……」
「条件を変えればうんと言うさ、たかが淫売だろう？いいから早く呼べ」
「…………はい」
自分の所の自慢の商品を貶とされたマサが少しムッとしたようだった。が、このオッサンには逆らえないのだろう。大人しく車の窓を開けて霊幻に声をかけた。
「……きぃちゃん！」
嬉しそうに霊幻が車に飛び込む。うんうん。スイッチ入ってんな、さすが霊幻。
「会いたかったぜ」
うるうると目を潤ませてオッサンを見上げる。
「新隆……」
我慢できずにオッサンは霊幻を抱き寄せて口付ける。
「あっ……んぁっ……」
オッサンの肉厚な舌に蹂躙される霊幻。うん。これはこれで。
ずるずるベチャベチャと好き勝手に霊幻を堪能したオッサンは、そのまま後部座席に霊幻を押し倒した。

「……カーセックスするなら移動しますけど」
シートベルトを付けながらマサが言う。
「よろしく」
霊幻のネクタイをほどきながら、オッサンがマサに指示した。

「……」
霊幻とオッサンは一旦座席に座り直してシートベルトをしている。
「んっ……」
が、オッサンは霊幻のシャツのボタンを外し、胸元に手を突っ込んで胸を揉みしだいていた。
「……っふ、ぅ……」
まだ街中だ。霊幻は窓の外から覗き込まれても違和感が無いように耐えているが、いたずらをされて顔を真っ赤にして唇を噛んでいた。
「ぁっ！んんっ……！」
オッサンがコリコリと乳首を捏ね始める。
霊幻は手を口元に持っていって、カリ、と人差し指を甘噛みした。
オッサンは胸元から手を抜き、次はいやらしく霊幻の太ももを撫で回す。
「……っ、」
ちょんちょん、と親指で兆しているモノをスーツの上からいじられて、ビクリと霊幻は肩を震わせた。
「……スーツ、汚れるから……っあ！」
やんわりと止めようとした霊幻の手をかいくぐってぎゅっとオッサンは性器を握る。
「や、やだ……やだって、なぁ……っ」
「霊とか相談所の営業に差し障るから、か？」
びくっと震える。快感じゃない。怯えだった。
「お前は所員にバレるのが嫌だからと、スーツすら贈らせない。普通ならプレゼントなんて大喜びだろうに、つまらないことだ」
「う……」
「潰してしまおうか？そんな相談所なんて」
「そ、そんな冗談、やめてくれよ……」

オッサンの目が据わっている。年甲斐もなく、嫉妬に狂った目をしていた。
「なら私のモノになりなさい。都内の高級マンションと、限度額無制限のクレジットカードをお前にあげよう。こんなにいい話は無いはずだが？」
「……それは断ったはずだろ……っん、」
ゴソゴソとオッサンが霊幻のズボンをくつろげ、中に手を突っ込む。
急所を握られ、霊幻の目に涙の膜が張った。
「……着きました」
どこかの寂れた道の駅の端っこにマサが車を停める。
「……それ以上霊幻さんを脅すなら、今日はお帰り願うって方向もあるんスけど」
じとりとオッサンを睨む。おお、ちゃんとケツモチの仕事してんなぁ。えらいえらい。
「……分かったよ。ほら、着いたなら出てってくれ」
「……楽しく遊んでくださいよ」
マサが車から出て行って道の駅に向かう。暇つぶしにコーヒーでも飲むのだろう。
「んっ」
我慢できない、と言いたげにオッサンはリアシートを倒して霊幻を押し倒す。
「君はっ、淫売のくせに、詐欺師のくせにっ」
「いたっ……ちょっ、ぁっ、」
中途半端に外されていたシャツのボタンが弾け飛び、ずるんとズボンと下着が降ろされる。
「私をコケにして……許さない……」
「そんな……そんなこと……」
身体の輪郭を確かめるようにオッサンの手が這い回る。
「ひっ」
ぎゅっと無防備な性器を握られて、霊幻の喉が引き攣った。
「分からないだろうねぇ、霊幻くん。ひたすら勉強して、偉くなって、より偉い奴にぺこぺこして、我慢して、我慢して、我慢して、

それでも売女１人手に入れられない私のことなんか」
「あっ、あっ、あぁっ、」
オッサンが乱暴に霊幻の性器をこする。
その乱暴な手付きですら、慣れた霊幻は快感を拾い上げて先走りをこぼす。
ちゅこちゅこと響く水音に、オッサンは機嫌を良くしたようだ。
「新隆。……ごめんなさいは？」
「あっ、ご、ごめん、なさいっ」
「うん」
「さっ、詐欺師でっ、嘘ついてっ、ごめ、ん……っ、ごめ、なさ……っ」
「そうだね」
「あーっ……！」
手の動きを速められて、霊幻は達した。
「新隆、勝手にイって悪い子だね」
「……ごめん、なさい……」
「スケベな悪い子だ」
「……えっちで、ごめんなさい……」
ぬらぬらと精液をオッサンが霊幻の腹に塗り広げる。
そのまま、濡れた指を後口に差し挿れた。
「あ……っ」
「もうグチュグチュじゃないか。期待してたのか？」
「うん……久々にきぃちゃんに逢えるから、嬉しくて……」
「……っ、新隆……っ！」
霊幻のリップサービスに感極まったオッサンは慣らしもそこそこに霊幻に挿入した。
「あぁ……っ！」
くん、と霊幻のアゴが上がる。
トロリと精液をこぼして、トコロテンしたのが分かった。
「入れただけでイったのかッ？このっ、淫乱がっ！」
「ごめ、ごめんなさぃ……っぁ、イく……っ！」
オッサンに腰を打ちつけられて、びゅる、と今度はセルフ顔射する霊幻。

「うっ、締めるな……っ！」
ぶる、と身震いしてオッサンが動きを止める。
「あ……あ……」
霊幻が思わず下腹を触る。ジワリと熱いモノが広がったのだろう。
「ナカ……出したなぁ……これから、デートなのに……」
「……すまない。掻き出すから」
ずるりと性器を抜き出したオッサンが霊幻のアソコを覗き込んで、思わず俺様もつられる。
「ん……」
オッサンが指を差し込んでぬぽぬぽ出し入れすると、ごぽりと濃い精液が後口から押し出された。
白濁液がトロトロと臀部まで流れていくのを、俺もオッサンもごくりと喉を鳴らして見てしまった。……めっちゃ奥に、沢山出されたんだな……。うん、これは中々……。
「……軽く掃除するから、車から出ててくれ」
車備え付けのティッシュで身体を拭きながら霊幻が言う。
「新隆。……愛してるよ」
ちゅ、とオッサンが霊幻の髪の生え際にキスをする。
「俺も。……大好きだよ、きぃちゃん」
ちょん、と鼻と鼻でキスをして。
ふわりと霊幻はオッサンに笑いかけた。

※

それから霊幻とオッサンはスーパー銭湯でイチャコラした。オッサンがサウナで汗を流す霊幻をガン見してたので、俺もピンク色に染まった霊幻の全身を眺め回したりした。
その後、個室の料亭でメシとあいなった。
……高そうっつーか、ここ、一見さんお断りのかなりの格式の店じゃね？
このオッサン、どこかの社長とかそんなんか……？
「コレ美味いな！」
ニコニコしながら霊幻が懐石を平らげていく。

「気に入ったのならおかわりするかい？」
それを見ながらにこにこつられてしているオッサンに霊幻はかぶりを振る。
「いや量が多いって……いいよ、おかわりは」
「遠慮するなよ。お腹が金魚みたいに出た霊幻君を犯すのも嫌いじゃない」
「……！」
さっと霊幻の頬が羞恥に染まる。
「……えっち」
「ふはっ」
笑ってオッサンは日本酒の猪口を傾ける。
「さてと。そろそろコッチの部屋を使うか」
オッサンが立ち上がって後ろの襖を開けると、そこはいわゆる『連れ込み茶屋』の一室だった。
部屋の真ん中にひかれた大きな布団。枕元にはコンドームやらローションやら箱ティッシュやらが置かれている。薄暗い行灯だけが照らすその部屋は、『そう言うこと』をするために、店側が準備しているものだ。
「新隆、こっちへ」
「……あぁ」
オッサンは霊幻を布団の真ん中に立たせて、自分はお膳を引き寄せて呑み食いを続ける。
「脱いで」
「……分かった」
気恥ずかしさに目を伏せながら、霊幻は白い指をネクタイにかけてしゅるりと外した。
ぱさ、とピンクのネクタイが足元に落ちる。
少し震える指が、スーツのボタンを外していく。衣擦れの音と、オッサンが酒を啜る音だけが部屋に響く。
肩を抜いたスーツの上着を、また、ぱさりと足元に落とす。
「次はズボンを」
「……分かった」
シャツのボタンにかけていた指が、ワザと身体の上を滑って、ズボ

ンのバックルの上で戸惑ってみせる。
ベルトの余りを持ち上げ、金具を持ち上げさせて、留め具を穴から抜く。しゅるしゅる、とゆっくりベルトが金具から抜かれていく。
がちゃん。音を立ててベルトが足元に落ちた。
ふる、と寒そうに霊幻は一度自身を抱きしめたが、その両手をするすると滑らせながら下ろし、ズボンの留め金に手をかけた。
ぷち……と留め金が外される。
ジッパーがゆっくりと降ろされ、ボクサーパンツに覆われた性器が少しずつ見えてくる。
「後ろを向け」
「……はい」
霊幻はくるりと後ろを向いて、ゆっくりとズボンを下ろしていく。
ボクサーパンツに覆われた、形のいい尻。白い太もも。筋張った膝裏。順繰りに見せてくる肢体を、目で追ってしまう。肌が目に眩しい。ズボンから足を抜き切って、布団に落とした。
靴下を脱ぐために、指を留めゴムに差し込む。する、する、とズラされていく靴下から丸いくるぶしが覗き、アキレス腱が見えて、かかとが現れる。足の甲が見えて、最後に珊瑚みたいな爪が乗った、形のいい足の指が出てきた。もう片方の靴下も、じれったい様な速度で脱ぎ捨てる。
「次は、下着」
オッサンの指示通り、霊幻は下着をズラす。
と、ストリップで興奮した霊幻自身が溢れ出て、シャツの裾を内側から押し上げた。
「……っ」
先走りで少し色の変わった下着をゆっくりと脱いでいく。
「よこしなさい」
オッサンが立ち上がって、脱いだ下着を霊幻から受け取る。
スン、と匂いを嗅いで、エッチな匂いだ、と言って霊幻を赤面させた。
「横になって」
シャツだけは身に纏ったまま、霊幻は布団に横たわる。
「ボタンを外して」

カリカリ、とオッサンに乳首を悪戯されながら、ビクつく手で霊幻はシャツのボタンを一個ずつ外していった。
「はっ……はぁっ……」
ぷち。喉元から鎖骨が現れる。
「なぁっ……ちくび、きもちぃから……」
ぷち。うっすら筋肉のついた胸元が現れる。
「脱ぐ間、いじんないで……っあ！？」
ぷち。みぞおちのへこみが見えて。
「ぁっ、やだっ、グリグリやだって、」
ぷち。うっすら腹筋が見えて。
「んっ、ふ……っ、イ、イっちゃう……っ！」
ぷち。下生えと、シャツを押し上げる性器の先端が見えて。
「やだ、って……！」
ぷち。最後のボタンを外した時の衣擦れで、霊幻は精を漏らした。
「は、……は、」
「新隆、可愛いよ」
絶頂の余韻で呼吸の荒い霊幻に、オッサンが追い討ちの様に口付ける。
「新隆、新隆」
顔から腹から、オッサンが余す所なく霊幻に触れる。
……その触れ方は、愛しさがこぼれ落ちているようなもので。
「ぁっ……きぃちゃん……」
それに呼応した霊幻が愛おしそうに、オッサンに口付けた。
「新隆、痛く無いかい？もういいかい？」
ローションを足しながらオッサンがグチュグチュと霊幻のアナルをいじり続ける。
「ぅあ、あっ、もう、大丈夫、だから」
キて。
熱っぽい霊幻の声を耳に吹き込まれて、ぐぁっと頭に血がのぼったオッサンは、コンドームを慌ただしくつけて、ズブズブと奥まで侵入した。
「ぁ……っ」
目の前がチカチカするらしい霊幻は、忙しなくまばたいて長いまつ

毛をきらめかせる。
「新隆っ、可愛いっ、好きだ……っ！」
「俺もっ、俺もきぃちゃんのこと、だいすき……っ！」
壊れ物のようにそっと霊幻に触れながら、オッサンは内部を味わうように腰をグラインドさせる。
「新隆っ、俺なぁ、もう、限界なんだよ……」
ポタポタとオッサンが涙を落とす。
「側に居てくれよ、新隆っ、俺の、側に……」
「……いるじゃないか」
優しく霊幻はオッサンを抱き締める……ってオイオイオイ！
「愛してるよ、きぃちゃん。ずっといっしょだ……っあぁ！」
激しくなった抽挿に目を閉じてイく霊幻。きゅうきゅう締め付ける内部に遅れてオッサンも射精する。
おま、お前……霊幻この野郎……。
「……ふーっ」
身なりを整えたオッサンがタバコに火をつける。霊幻は軽くシャワーを浴びて戻ってきた。
「あ、そうだ。俺、もうウリ辞めようと思っててさ、今日でお終いにさせてくれないか？」
そしてピロートークのノリで、足抜けを切り出した。
「……は？」
ぎ、ぎ、ぎ、とオッサンが壊れたロボットみたいに振り返る。……いやそりゃそーだろ！さっきの今で！馬鹿なのか！？霊幻お前！！こんな時に限って察しが悪ぃな！？この地雷踏み抜き野郎が！！
「今までありがとな！じゃあ、さようなら」
「待、待っ」
にこっと愛想笑いする霊幻の手首を掴むオッサン。
「そ、そんな、そんな言葉で──」
「ああそっか。これまでご迷惑をおかけしました。長らくのご愛顧、まことに感謝しております。今後とも、お客様のご多幸を、心よりお祈り申し上げます」
いやそうじゃねぇよ。あーっもう！こいつの自己評価の低さが最悪の形で出ちまった！

こいつは客からの愛情を微塵も理解してねぇ……！
「新隆……」
「今後は霊幻の方が自然かと」
「……霊幻さん、ちょっと待ってくれ。今夜の分はまだ時間があるはずだろう？せめてきちんとお別れさせてくれないか」
「ああそっか、そうだったな」
「場所を変えよう」
おーっとキナ臭くなってきたぞ？

※

霊幻とオッサンは無言でマサの車に乗っている。
「そういえば霊幻君には私の職業を言っていなかったね。私は参議院議員、×× 黄一だ。今後はそちらの方で、どうぞよろしく頼むよ、『霊とか相談所』の所長さん」
まてまてまて。マジかよ、ちょっと待て。
マズイマズイマズイ、それが本当だとしたら、マジで相談所が潰される……！
これはヤバい。しかたねぇ、やるしかねぇ……！
賭けだが俺は酔っている議員になんとか取り憑き、細工をした。
これが切り札になってくれればいいんだが……。
車は森の中の大きな日本家屋の門中に入って行く。
「「おかえりなさいませ、旦那様」」
「ただいま。すぐに宴の準備を」
ずらっと並ぶ召使い達。うーん、これはいよいよヤバいな。
えーっと、霊力の貯金どれぐらいだったかな……。
霊幻の腰を抱いて屋敷に連れ込む議員。
その手にスタンガン。
あっ。
気絶させられやがった。まあそりゃそうだろうな。
そのまま服を脱がされて真っ赤な肌襦袢を着せられて、座敷牢に繋がれる霊幻。うーん、用意周到だな。前から計画されてたなこりゃ。

さてと、あの馬鹿の身体に憑依しに行くか。
「……う……」
ちくしょう、まだ少し身体が痺れるか……って、おっと！
目覚めた霊幻に追い出された。
「エクボぉー、下手打った」
「見てたから知ってんよ。いいか……」
俺様は霊幻と作戦会議をして、議員を待った。
「新隆……キミはもうそこから出られないよ。残念だよ、こんな結果になって」
「きぃちゃん……実は俺、悪霊に呪われてんだ」
「は？」
パァァン、と座敷牢の鉄格子のはまった窓を粉々に割ってやる。
キラキラと水晶みたいに煌めく破片が、霊幻に降り注いだ。
「ひっ！？」
「俺のことを好きになって、でもそれが幻想だったって気が付いて首を吊っちまった男の霊だ。俺に近づく相手を、憑き殺そうとするんだよ」
「がっ……あっ……！」
ガラスの破片が霊幻だけを避けていく。息苦しくなってもがく議員の頬を、そっと霊幻が撫でる。
「きぃちゃんが取り憑かれないように、俺、別れようと思ったんだ。きぃちゃんの為だよ？分かってくれるよな？」
コクコクと議員が頷く。と、息が出来るようにした。
「さよならきぃちゃん。好きだったよ」
ガチャガチャガチャ、と霊幻の拘束具は勝手に外れて落ち、座敷牢の鍵が開く。
赤い肌襦袢を棚引かせて出て行く霊幻を、議員は追わなかった。
ただ、ひたすらに、喪失の涙を流していた。

※

その後ちゃっかり服を回収する霊幻の図太さには舌を巻いた。外で待っていたマサが、今回はもうダメかと思った、無茶しないでくだ

さいと少し涙目で霊幻に言った。

※※※※※※

ご褒美があって然るべきでは、と俺様が言ったので、次の日議員が入れていた予約枠を貰うことになった。
「何読んでんの？」
霊幻が準備する間、文庫本を読んでたらいつの間にか後ろにいた霊幻に覗き込まれた。
「グッド・バイだ。短編集だから、お前を待ってる間に読むのに丁度良いんだよ」
「太宰治ね……その話は知らないなぁ。どんな話だ？」
「んん？色んな話が入ってるが、太宰にしては明るめの話が多くてな……表題になってる『グッド・バイ』は、恋人作りまくってた男が、心機一転関係を清算して身綺麗にしようとする時に、力持ちの美女に恋人のフリをして貰って諦めさせる、ってコメディだ」
ぷに、とおれにしなだれかかっていた霊幻が唇を押す。
「なんかそれ、今の俺たちに似てる」
「はは、そうかもな。──お前さんの、グッド・バイだ」
俺は文庫本をパタンと閉じて、いそいそと大人のオモチャを準備し始める。ひく、と霊幻の顔が引き攣った。
「……何してんだ？」
「俺様今日は霊幻に潮吹かせてみたい」
純粋な好奇心だ。
「じゃあやり方教えるから！まず──」
「いや、自分で見つけてみたい」
違った。純粋な探究心だ。
「イカせまくればいいんだろ？」
ニパッと俺様が笑うと、びくっと霊幻が涙目になった。

※

「あ゛あ゛あ゛あ゛、ィってう、イってるからあっ！」

オモチャでいじられすぎて、全身ピンク色に染めた霊幻がはくはくと口を開閉させる。
「んー？でも出てねぇぞ？」
「ヒギっ！今ちんこ触るなぁっ、ばかぁ……っ！」
ぞわぞわぞわ、と霊幻の肌が粟立つ。メスイキしてんのか。
うーん、メスイキしまくって全身性感帯みたいになってる霊幻もイイが、俺様、潮吹きさせてみたいんだよなぁ。
「あ、そーか」
ズポン、と凶悪なバイブを抜いて、
「あ゛っ！」
凶悪なチンポをズブっと突き入れる。
「〰〰〰〰〰〰〰っ！！！！」
ぴゅる、と霊幻がトコロテンする。抜いて、また一気に入れると、またトコロテン。
「かひっ……！」
それを何度も繰り返すと、目をしばたいて霊幻が過ぎた快感に舌を突き出す。その舌を指でいじってやりながら、抜いて、挿れて、抜いて、挿れてを繰り返し続ける。
「や゛めっ……あ、あ、イク……変なの来る……っ！」
トドメとばかりに壊れた蛇口みたいに精液をこぼしていた霊幻の性器をごしごし擦ってやれば、透明な潮を盛大に腹の上に吹いた。
「あ゛あ゛あ゛あ゛っ、ぁ゛あ゛っ……！」
がくがくと霊幻の足がピンと張ったまま震える。衝撃で中出ししちまうぐらいあいつのナカはキッツキツになった。気持ちいいというより苦しそうに霊幻は顔を歪めていたが、トロけた瞳が悦楽を隠せていなかった。
「おー、吹いた吹いた。どうだった、霊幻？」
返事の代わりに枕が飛んできて。
珍しい反応に、俺様は無邪気に笑った。

※※※※※

今日は相談所に珍しく律も遊びに来ていた。

「これ、借りてた参考書です。結構助かりました。……不本意ですが」
「おー、そりゃ良かった……って、なんだよ」
律が突然無言になり、霊幻の下腹に手を当てて……何かを探っていた。
ピリ、と律の雰囲気が悪くなる。
「……エクボの痕跡がある」
しぃ……ん、と相談所が静まり返る。
「昨日緊急で憑依してもらったからなぁ。それじゃね？」
面の皮の厚い口八丁がしれっととぼける。
「なぁんだ、そうなんですね」
シゲオが笑う。目が笑っていない。
「……エクボ、今日は一緒に帰るよね？昨日の話を聞かせてよ」
俺様は必死に空笑いをする。

バレるとマズイんだよなぁ。

俺様が、シゲオ達の気持ちを『知りながら』、霊幻を買ったこと──。

続